

# ○參照第四

## 北海道地震記錄概調查

委員 大森 房 吉

北海道ニ於ケル地震ノ分布(茲ニハ明治廿七年三月廿二日大震前ノ地震ニ就テ論ス)

北海道殊ニ其内部ハ人烟稀少ナレハ精密ノ地震報告ヲ得ルコト能ハサレトモ次ニ表示スル明治十八年ヨリ廿五年迄八年間各測候所及ヒ郡役所等ノ報告ニ由リテ見レハ地震ノ最多ナルハ根室附近ニシテ最少ナルハ島ノ北端及ヒ壽都、江差近傍ナリトス

北海道ノ地震分布(第一圖)ヲ概論スレハ島ノ北半部ト南半部トニ區別スヘク南半部ハ地震地ニシテ北半部ハ稀地震地ナリ而シテ又南半部ハ日高山脈ヲ境トシテ更ニ東部ト西部トニ別ツヘク此等ノ二地方ニシテ感スル地震ハ其震原地ヲ異ニスルカ如シ即チ西部ノ地震ハ渡島東方ノ近海ニ起リ東部ノ地震ハ根室花咲半島ノ東南ニテ海中遠ラサル所ニ發起スルカ如シ  
根室近海ノ地震震原地ハ頗ル活動力ニ富ミ根室ニテ通常一ケ

年ニ平均四十回ノ地震アリ而シテ時々強震ヲ發生セシムルナリ

北海道南半部ノ地震ハ小區域内ニ限レル火山性地震ヲ除クノ外ハ前述ノ如ク大抵海中ニ發起スルモノナレハ屢々多少海水ノ變動即チ海嘯ヲ伴ヒ起スヲアリ海嘯ノ大小ハ海岸ノ形狀及ヒ海底ノ深淺ニ關スレモ主トシテ地震動ノ強弱ニ由ルナルヘシ天保十四年三月廿六日及ヒ安政三年七月廿三日ノ地震ノ如キハ非常ノ海嘯ヲ起シテ地震ヨリモ一層甚シキ災害ヲ生シタルナリ

北半部ニ發起スル地震ハ極メテ稀ナレトモ此等稀少ノ地震ハ一定ノ震原地方ヲ有セサルカ如シ天保五年正月朔日ノ石狩地震、明治七年二月廿八日天鹽地震ハ蓋シ共ニ局部ノ小地震ニテアリシカ内地ニ發起シタルヲ以テ其震央ニ於テ震動激烈ナリシナルヘシ

要スルニ北半部ハ稀ニ小地震ノ災害ヲ被ルコトモアルヘク而シテ南半部ニテ非常ノ激震動ヲ感シタルキニハ海嘯ノ注意ヲ爲スコト安全ナルヘシ

海嘯 地震ノ爲メニ生セル海嘯ハ地震後直チニ來ルモアリ或ハ數時間ヲ經テ來ルモアリテ即チ震原ト海岸トノ距離ニ關ス而シテ大抵最初ニ海水ノ退却スルヲ以テ兆候トス

明治十八年ヨリ廿五年迄八年間北海道各地地震年別回数表

地	年	18	19	20	21	22	23	24	25	合計
釧路, 厚岸		15	23	4	16	25	18	18		136
川上		9	17			12	9			47
釧路		6	9	3	9	3	3	20	10	63
昆布森				3						3
白糠		2		1						3
根室, (根室)		33	43	33	16	48	54	51	29	307
標津		3	2	2		2	1			10
千島, 紗那		1	2			10	5			18
蕊取		3								3
振別		1								1
國後		6								6
根室, 野付		2								2
十勝, 十勝									3	3
廣尾							1	6		7
當河							1			1
襟裳岬						1			2	3
日高, (襟裳)				2	4	7	4	7	3	24
浦幌		3				2	1	3		9
渡島, 松前		2				2				2
(函館)		9		10	7	22	3	1	7	6
茅部		3			1		1	1		75
田山		2		1						6
志後, 檜岩		2		1	1					3
(壽都)		1		1	1	2	4		2	2
平樽		1	1		2					11
小樽		2	1							4
越前		1					2			3
膽振, 山越		1								3
勇室		7	2	3	6	3	2	1		24
增毛		3	1		2	2	1	3		12
天北, 鹽見		2		8						10
(網走)					2					2
(宗谷)					3			1		4
石狩, (札幌)		3	1	1	3	2	7	2	6	25
(上川)							1	1		2

參照第四 北海道ニ於ケル地震ノ分布

注意 地名ニ( )印ヲ施セルハ測候所ニシテ他ハ郡衙ナリ

北海道ニ於ケル近年ノ強震、明治十一年以來北海道ニ於ケル強震ト稱スヘキモノハ都合六回ニシテ即チ平均三年程ニ一強震アル割合ナリ尤モ此中充分強クシテ多少建築等ニ損害ヲ來タシタルハ明治十五年十月及ヒ廿七年三月ノ地震ニシテ國後島及ヒ根室近傍ニテハ前者ノ方後者ヨリモ強カリシカ如シ建築ニ損害ヲ及ホス如キ激震ニ就キテ言ヘハ北海全道ニ於テ平均十年内外ニ一回ノ割合ナルヘシ

左ニ近年北海道ニ於ケル強震ヲ略記ス

明治十八年九月五日午後八時(第二圖ヲ見ヨ) 此地震ハ陸地

總面積三千百四十二方里ニシテ千島ノ國後全島、根室、釧路

ニ於テハ震動強ク戶外ニ避ケシ者十中八九ニ居レリト云フ

明治廿一年二月五日午前一時(第三圖ヲ見ヨ) 此地震ノ陸地

總面積ハ九千六百七十方里ニシテ就中震動ノ最強カリシハ

陸奥北東、六分、渡島東三、二分、膽振南東、二分、日高南九、二分、十勝南西、二分、ナリシカ幸ニ

損害ヲ生スルニ至ラザリシ

明治廿六年六月四日午前二時廿七分地震(第六圖ヲ見ヨ) 陸

地總面積ハ九千四百方里ニシテ強震地方ハ根室全部、釧路

南東五分九百六十方里ナリ、格別ノ損害ナカリシ

明治廿六年六月十三日午後七時四十二分地震(第七圖ヲ見ヨ)

陸地總面積ハ九千八百方里ニシテ強震部ハ日高、十勝、釧

路、根室ノ大部分ニ亘リタル千八百方里ノ地方ナリ此ノ地震ニ於テ釧路海岸其他ニテ地ニ小龜裂ヲ生シタル所アリ

#### 北海道顯著地震圖

北海道地震中ニテ顯著ナルモノ、震域圖ハ第二圖ヨリ七圖ニ示スル此等ノ地圖ハ皆多少本年三月廿二日地震ノ震域圖ト類似シ其震原ハ北海道ノ東岸ヲ去ルコト遠カラスシテ之ニ略ホ並行セル一帯地ナルカ如シ

此等ノ地圖ニ就キテ見ルニ一般ニ地波ハ北方ヘハ只々僅距離ニノミ達スレトモ南西方ニ於テハ大凡ソ二倍ノ遠距離ニ達スルカ如シ蓋シ千島ヨリ來リテ北海道ヲ橫斷スル火山脈ノ爲メニ遮止セラレテ南東海中ヨリ來レル地波ノ幾分ハ山脊ニ通過シ能ハサルモノナランカ

#### 根室及ヒ札幌ノ地震數

根室及ヒ札幌ニ於ケル年別及ヒ月別地震回數ハ次ニ表示スルカ如シ即チ此等ニ地方ニ於ケル毎年平均地震回數ハ三十九及ヒ五、三ニシテ根室ニテハ札幌ニ於ケルヨリモ地震ノ頻多ナルコト七八倍ナリトス

根室及ヒ札幌ニ於ケル一ケ年中地震度數ノ變化ハ次ノ圖表ニ示スカ如ク兩所ノ曲線ノ同形ニ非サルハ全ク此等兩地方ニ感スル地震ノ震原異ナルニ由ルナルヘシ、各曲線トモ二回ノ最

高及ヒ最低ヲ示シ根室ノ場合ニテハ第一最高ハ十二月、第二最高ハ五月ニアリ又第一最低ハ二月、第二最低ハ八月ニアリ、札幌ニ於ケル最高、最低ハ根室ニ於ケルトハ異レル月ニアリ

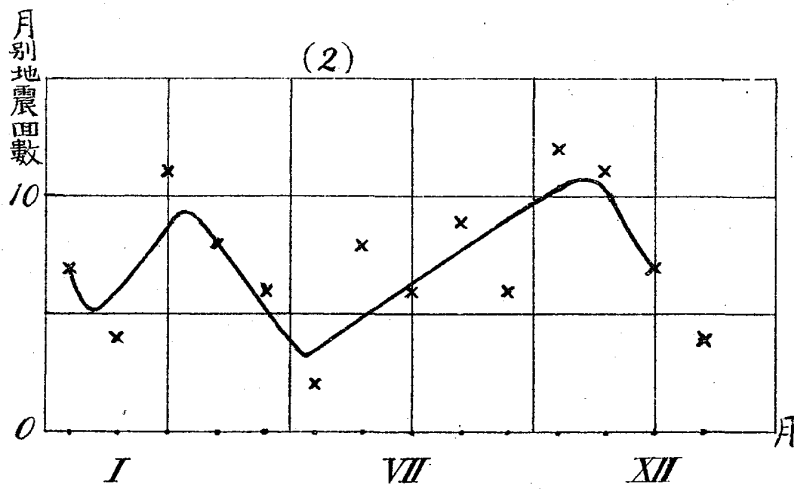
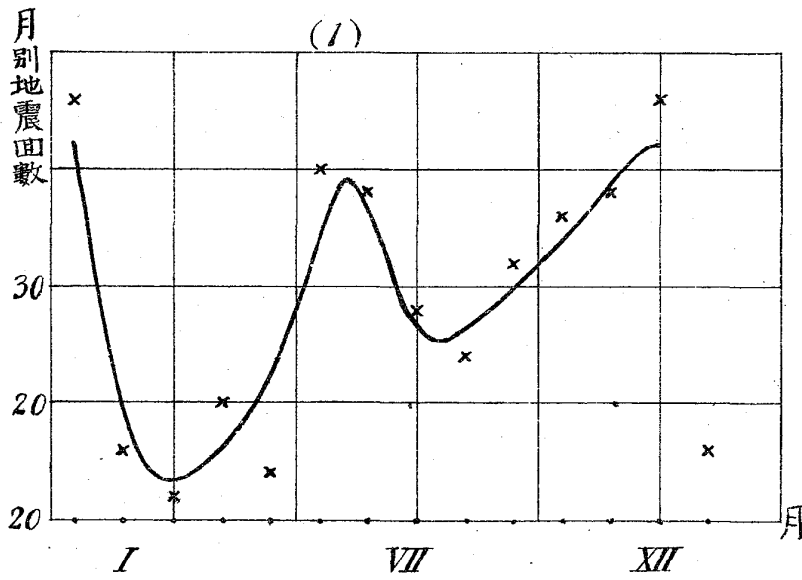
根室毎月地震回数表(明治十八年ヨリ全廿六年ニ至ル)

年	月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	計
明治十八年				三	一	一	四	五	一	四	七	六	一	三三
同十九年		二	五	四	三	三	三	二	四	四	五	二	六	四〇
同廿年		二	二		二	七	二	五	五	一	四	三	三	三三
同廿一年			三	四		一	二	二	一	二	一	二	一	一八
同廿二年		六	三	一	三	七	二	三	六	三	三	四	四	四八
同廿三年		三	三	三	六	七	六	三	四	二	一〇	七	五	五四
同廿四年		二	三	七	三	二	三	三	四	二	一〇	二	一	四九
同廿五年		五	一	一	二	三		二	四	五	三	三	三	三〇
同廿六年		三	一	二	二	四	一	五	五	四	四	二	四	四八
合計		二三	二二	三五	三三	三五	三四	二九	二七	三二	三三	三四	三八	三五三

平均一ヶ年三十九回

札幌毎月地震回数(明治十年ヨリ全廿六年ニ至ル)

年	月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	計
明治十年														二
同十一年						一								四
同十二年														一
同十三年		一	一											四
同十四年			三											六
同十五年					二									四
同十六年		二	二							二				一七
同十七年									一					二
同十八年								一						八
同十九年			一											二
同廿年				一					一					三
同廿一年			三											六
同廿二年		一												四
同廿三年			一							一				七
同廿四年														二



地震度數一年中ノ變化  
 (2)(1) 札幌(室九十七年)間九十五回ノ地震分布ヲ示ス  
 (2) 札幌(室九十七年)間九十五回ノ地震分布ヲ示ス



浪起リ海水常ヨリ四十五間位陸ヲ浸シタルモ暫時ニシテ平常ニ復セリ

久遠郡熊石村 寛保三年七月十九日夜西南遙ニ大島ノ鳴動

ヲ聞ク暫時ニシテ海水一時ニ氾濫シ人畜死傷甚シ

根室 (野付ニテ)春大地震アリ(天保十四年三月廿日ノ

カ)曉四時ヨリ俄然雷鳴スルカ如キ響聲ヲ聞クヤ暫クシテ

震動シ漸々激烈ヲ逞シ地裂ケ水湧出シ峙ノ鳥類搖リ落サレ

疎製ナル人家サイ轉倒スルカ如ク人モ亦歩スル能ハサル程

ナリシカ稍々波靜ニ趣ムカントスルヤ津波里外ノ沖合ニ屹

然高山雪ヲ頂キシモノ、如キ有様ニテ動搖シ岸ニ向テ來ル

アリト雖モ數十町沖合ノ瀬戸ニ障ラレ此所ニ至リ波勢挫ケ

テ二トナリ大ハ目梨ニ趣キ小ハ野付ニ至リシモ幸ニ只夕餘

波増水ノミニシテ別ニ差シタル變遷ヲ見サリシト云フ」唐

太村ニテハ地裂湯水シ沼トナリシモノ一二ヶ所アリテ今ニ

其形ヲ存シ幅三四間長サ二三十間ノモノアリ

(以上各地測候所報)

宗谷 古昔海嘯ノアリシコトハ宗谷枝幸兩郡ニ於テ口碑ニ傳

フルモ其年代詳ナラス

爾志郡熊石村 寛保元年七月十九日夜天色朦晦西南遙ニ大

島鳴動ヲ聞ク海水一時ニ氾濫シ人畜死傷殆ト竭ク云々

増毛郡役所 文久三年八月八日晝間ヨリ起リ夜十時頃迄海

嘯、通常浪打際ヨリ最高直徑二十尺餘最低十八尺餘ナリシ

トソ

浦河郡 安政三年七月廿三日海嘯アリ浦河灣ニ繫泊セシ日

本形五百石以上ノ船舶二艘顛覆セシコトアリシト云フ(函館

地震ノ餘響ナルヘシ)

壽都 口碑ニモ傳フルコトナシ

龜田郡 天保十四年三月廿六日未明ヨリ地震アリ廿七日ニ

至リ海嘯アリシモ人畜及家屋ニ損害ナク云々

安政三年七月中地震アリ次テ渡島國龜田上磯茅部ノ沿海膽

振國山越郡ノ海濱一帶ニ海嘯來リ地方ニヨリ人家ヲ浸シ多

少損害ヲ來セシモ人畜ニハ災害ナク」又右海嘯ハ龜田村ヨ

リ同汐首岬マテハ最モ強ク同郡尻岸内邊ニテハ大ニ弱ハク

昆布採收中故小ナル漁舟ニテ海中ニ居リシモ覆没シタルモ

ノナカリシ惠山岬以東ハ又稍強ク榎法華村ニテハ山林ニ逃

ケ往キタルモノ多カリシト云フ

松前 寛保元年七月十九日曉松前郡福山ヨリ爾志郡熊石村

沿岸海嘯アリ死者千餘人(福山沿岸ニテ百餘人)家屋ノ破壊

隨テ多シト

天保ノ初年十一月末日(年及月日不詳)前日來數十回ノ地震

アリ然レモ強烈ナル震動ニアラサルカ全ク止ミシカ午後一時頃海嘯兩三回驟ニ至リ沿岸ノ家屋數十ヲ洗ヒ去リ云々  
札幌地方石狩、濱益郡地方ニハ海嘯等ノ口碑ナシ

白老郡 大凡三百年前白老海岸ニ海嘯アリ家屋流出セリト  
釧路郡 天保十年三月十八日午後二時大地震アリ國泰寺門

前ニ設置セル石燈籠轉倒シテ戸障子等破損セリト云フ

天保十四年三月廿六日午前六時大地震アリ戸障子小屋等倒散所々地ノ裂クルヲ五六寸續テ海水漲溢シ眞菴村及厚岸市街(其頃厚岸市街ヲ會所前ト稱セリ)ハ一面ニ海トナリ老若男女相扶ケテ盤螺山「ヲフナイ」山等ノ高地ニ難ヲ避ケ溺死者四十五名ニ及ヒ同十時マテ海水ノ漲溢セシト二度地震六度近山鳴動セリ盤螺山半腹崩レ海中へ突出スルヲ十五間餘ニケ所ニシテ此海嘯ハ平水ヨリ一丈五尺餘ノ水量ニ増シ土人ノ家屋孰レモ流亡シ畜類ノ死傷其數算ナシ同十二時ヨリ颶風起リ國泰寺及會所ノ屋ヲ吹キ飛ハシ翌廿七日ニ至リ風波風キ靜マリ午前六時ヨリ八時迄強震三回翌二十八日午前七時迄微動數回アリテ鎮靜セリ  
厚田郡 ニテハ海嘯等ノ口碑ナシ

(以上各地郡役所報)

天保雜記

天保五年五月十八日、御用番大久保加賀守殿へ差出私領分西蝦夷地ノ内、イシカリ、ト申場所當正月朔日己ノ刻過ヨリ地震強、二月廿二日迄日々地震ニテ地割、泥吹出、制札塲其外破損ノ覺

一制札塲破損 一ヶ所

一會所潰 二軒

一弁天社大破 二軒

一板藏潰 四軒

一同半潰 廿三軒

一茅葺藏潰 六軒

一蝦夷家潰 廿三軒

一同半潰 三軒

一蝦夷人物置 十三軒

一魚藏潰 六軒

人馬怪我等無御座候此段御届申上候以上

四月十九日 松前志摩守

時風錄 七月(安政三年)箱館表地震并高浪ノ次第(箱館ヨ

リイシカリ詰エノ文通)

然ハ廿日頃ヨリ日々地震兩三度程宛有之候處同廿三日午ノ下刻、地震強、其後モ晝夜少シ宛震申候、尤潰家怪我



人等無之處同日未ノ下刻高浪平水ヨリ一丈餘相増候尤沖ノ口御番所別條無之候得共地藏町并枳形内外建家床上水冠四五尺ニ及ヒ候右兩災ニ付海岸通り住居ノモノ共廿三日今以露宿罷在不便之事ニ有之右ニ付窮民トモへ焚出シ又ハ御救米百俵被下市中身元ノモノ共ヨリ夫々施シ差出申候且彼ノ御役宅向ハ聊別條無之其外市在共人馬怪我等一切無之候右爲御知ラセ御心得共申置候云々

七月廿七日

安間純之進

水野一郎右衛門様

イシカリ隣場ユウフツ詰ヨリイシカリ詰ノ交通

然ハ去ル廿三日晝九時頃地震餘程強其上八時前ヨリ高沙參リ夕方迄度々尤會所前左程ノ儀ニモ無御座候サル境ハ餘程崩所出來、外無事、サル領會所前ハ高沙強、エトモ邊、義餘程高沙押入候趣ニ御座候御地ハ地震高沙等無御座候哉奉伺候

七月廿七日

鈴木庄助

水口一郎右衛門様

イシカリ邊ハ格別ノ義無之趣

北海道釧路國厚岸國泰寺日鑑ヨリ抄出

天保十四年三月廿六日前代未聞ノ大地震津浪左ニ

一曉六ツ時地震如例相心得候處追々募依之拙内庭へ飛出シ餘ハ裏口ヨリ逃出ス暫時ニシテ戸障子倒散鷄杯モ巢ヨリ落無事靜ニ相成リ通辭帳役兩三人見舞來ル……詰所杯ハ皆無震破シ候ト申歸ル夫ヨリ所々見分ノ處八幡社四五尺程モ移座リ床落テ門外石燈籠石佛等皆々倒散本堂前ヨリ庭所々四五寸位地割レ一同感心致居候所へ會所ヨリ番兩三人奔走ニテ津浪ノ由申來ル於門外承知仍會所ノ邊一望之處必大海ノ相見ニ驚入リ俄ニ寺へ掛附ケ其所へ支配人帳役入來御大切ナル御荷物皆々山へ御出シ可有之旨申歸ル和夷澤山道シ吳早々取調へ諸道具ハ長持兩掛等へ相詰メ山へ持參リ本尊佛舍利諸佛ハ塲所鎮社龜田宮へ安置拙守護詰合其傍社へ諸荷物守護所々一見ノ所向岸ニ番家夷家一軒不殘流出仍テ多分流死モ有之由噂申合候四ツ頃迄ニ大浪兩度大地震五六度社ノ内危ク今ニ震倒シ候位候處へ三役ノ物婆羅山下兩所土邊海中へ崩出右ノ咄シ……九ツ頃ヨリ風起リ會所屋根杯飛散候事翻々如雪前讀ノ時刻ニ相成候共同斷仍テ寺後へノ山見分致地所宜キ所見定メ疊等爲持手配致置……大混雜中へ山田雇船順風ニテ入津海中ハ格別ノ事無之ナト一同感心シ出持番人二十人程乘込俄ニ人數増ニ相成大ニ手配行届キ候七ツ頃ヨリ追々平穩ニ相成無事安心……夜中山鳴リ餘程募リ

九ツ半時八ツ半頃七ツ頃右三度大地震實ニ心配筆紙ニ難懸  
一廿七日晴、天風波靜曉六ツ時ヨリ下刻迄ニ地震三度……晝  
夜地震絶ヘス……此夜暫時モ地震不歇

一廿八日晴、平穩向岸ノ夷人男女三十四人流死ト申事「ポロ  
ト」ニテ十一人兩所ニテ四十五人餘ト申事

一廿九日晴、晦ハ曇天

一四月朔日ハ晴、二日三日四日ハ雨ル八十八夜晴風波平穩五  
日六日晴、七日細雨……八日雨前日九日無事地震不歇此夜  
ヨリ夜番見合セル事

一五月十三日 大地震津波ノ見分目附役氏家丹右衛門上下七  
人ニテ向岸陸地ニテ着

根室ニテ永住ノ人ニ聞キタルコト

明治初年ヨリ根室ニ於ケル最強ノ地震ハ左ノ二回ナリトソ

明治十一年八月中、(日缺)午后三時頃地震アリ

明治十四年(十五年ナラン)十月(日缺)午後九時頃地震アリ今

回ノ地震ヨリハ一層激裂ニテ當時ハ未ダ煉化築造物ハアラサ  
リシカ陶器等ノ損害ハ頗ル甚カリシ尤モ海水ニハ別段異狀ナ  
カリシ由シ

國後島泊湊ニテ六十年以來住居セル老人ノ話シ左ニ

泊ニテハ六十年以來今度ニテ四回ノ強震アリシ由シ(内一回ハ  
下記ノ地

震ニテ又一回ハ天保(十四年地震ナルベシ)明治十二年七月頃強震アリ今回ヨリハ激ク  
シテ板藏等倒レ或ハ大破損ヲ受ケシモノモアリシトソ(根室  
ニテ明治十四年十月ニアリシト云フ強震ト同一ノモノナルヘ  
キカ如シ)

釧路ニテ生レタリト云ヘル六十以上ノ「アイヌ」老人ノ話ニ其  
幼時釧路ニテ大地震アリテ四五尺モ地割レ板ヲ渡シテ歩シタ  
リ又厚岸ニテハ大津浪アリシ由聞ケリト云ヘリ(天保十四年  
地震ノコナリ)

北海道志ヨリ抄出

### 地震

寛永十二年正月二十一日松前地大ニ震フ

明和三年正月松前地震フ

文政正月十六日奥蝦夷地震フ十九日ニ至ル迄百五十餘度

明治七年二月廿八日天鹽國地大ニ震ヒ留萌郡山崩海ニ落チ及  
ヒ人家橋梁等多ク壞ル

### 海嘯

慶長十六年冬十月東蝦夷海溢レ人多ク死ス

寛永十七年六月十二日戸梶今ノ十勝龜田海嘯人家ヲ漂シ船ヲ破ル

百餘隻民夷溺死スル者七百餘人

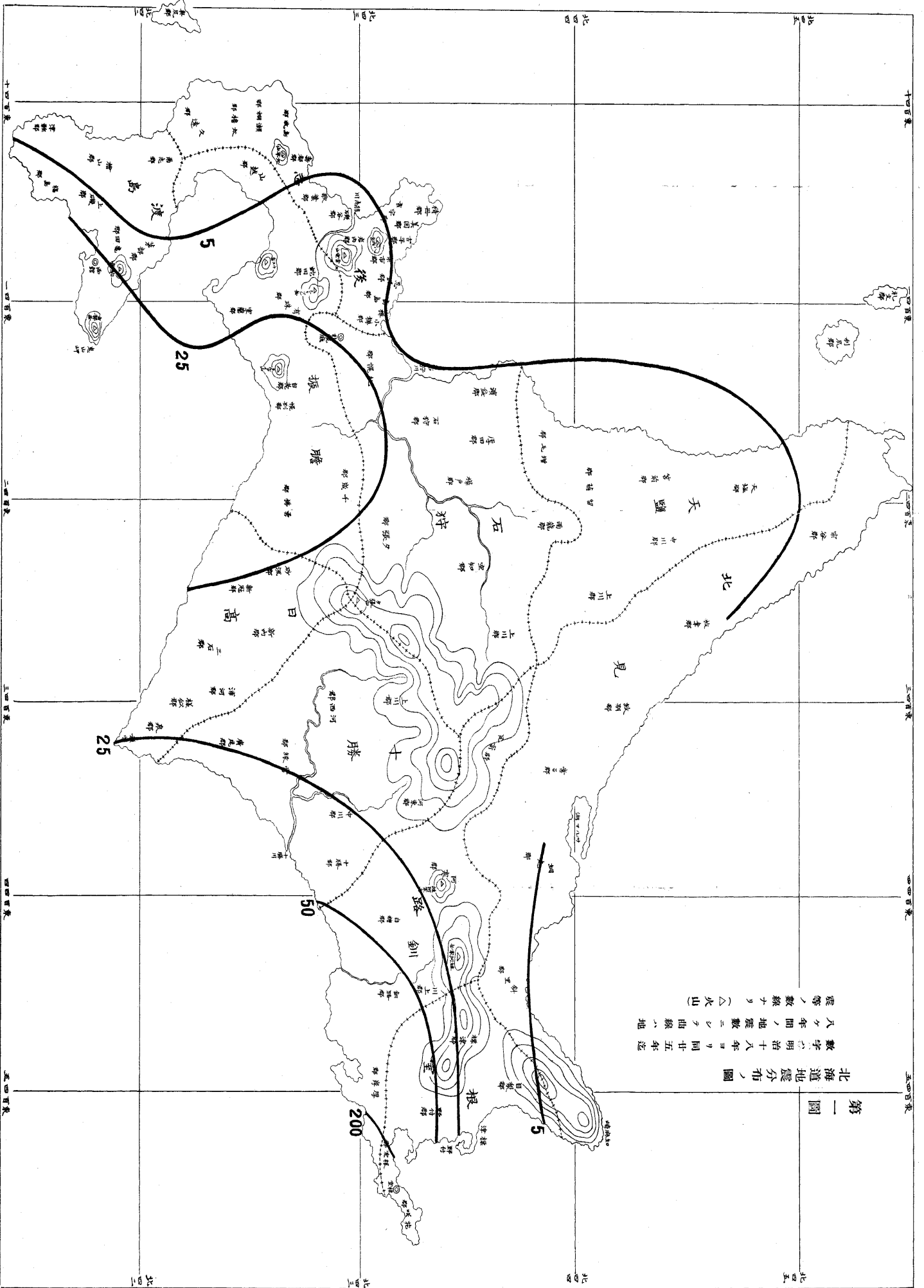
寛保元年七月十九日曉根部田ヨリ熊石ノ間海嘯溺死スル者千

餘人

安永九年四月得撫島地震ヒ海嘯露船ヲ飄盪シテ山上ニ至ル復  
海ニ下スヘカラズ露人船ヲ棄テ去ル

寛政十七年六月十三日松前上ノ國海嘯アリ

安政三年七月箱館大番兩地大ニ震ヒ海溢ル水高キ一丈餘家ヲ  
破リ船ヲ壞ル

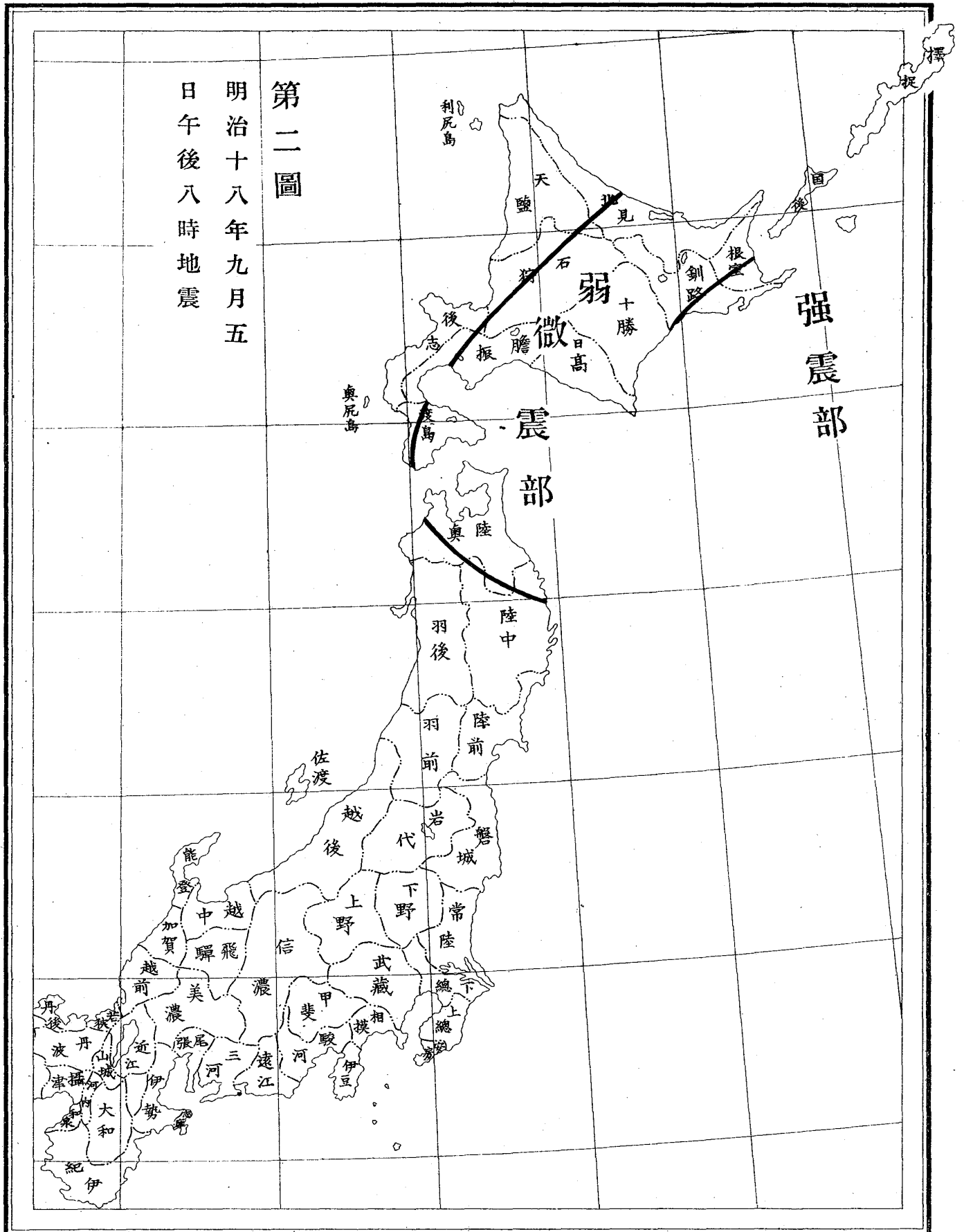


第一圖

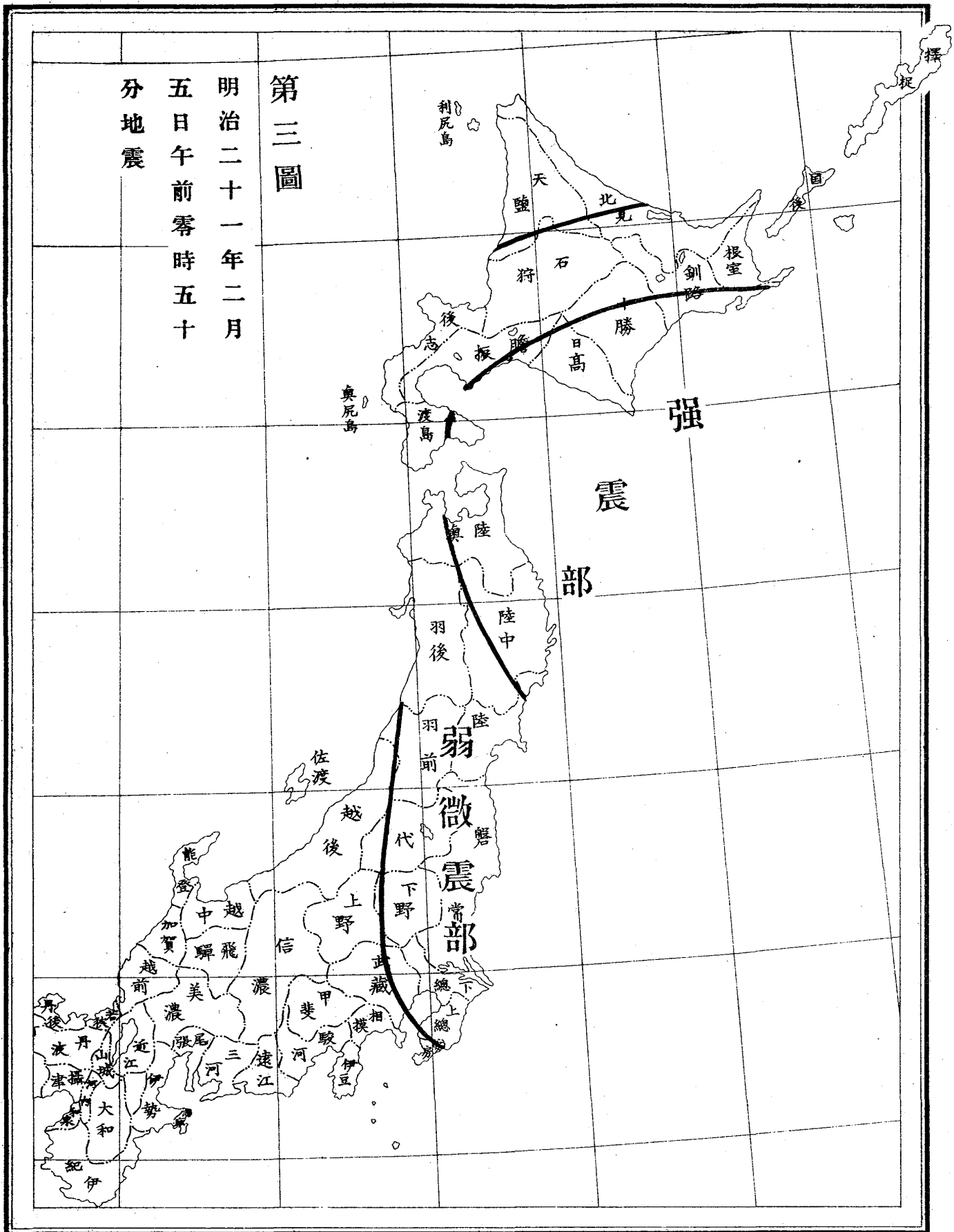
北海道地震分布ノ圖

數字ハ明治十八年ヨリ同廿五年迄  
 八ヶ年間ノ地震數ニシテ曲線ハ地  
 震等ノ數線ナリ(△火山)

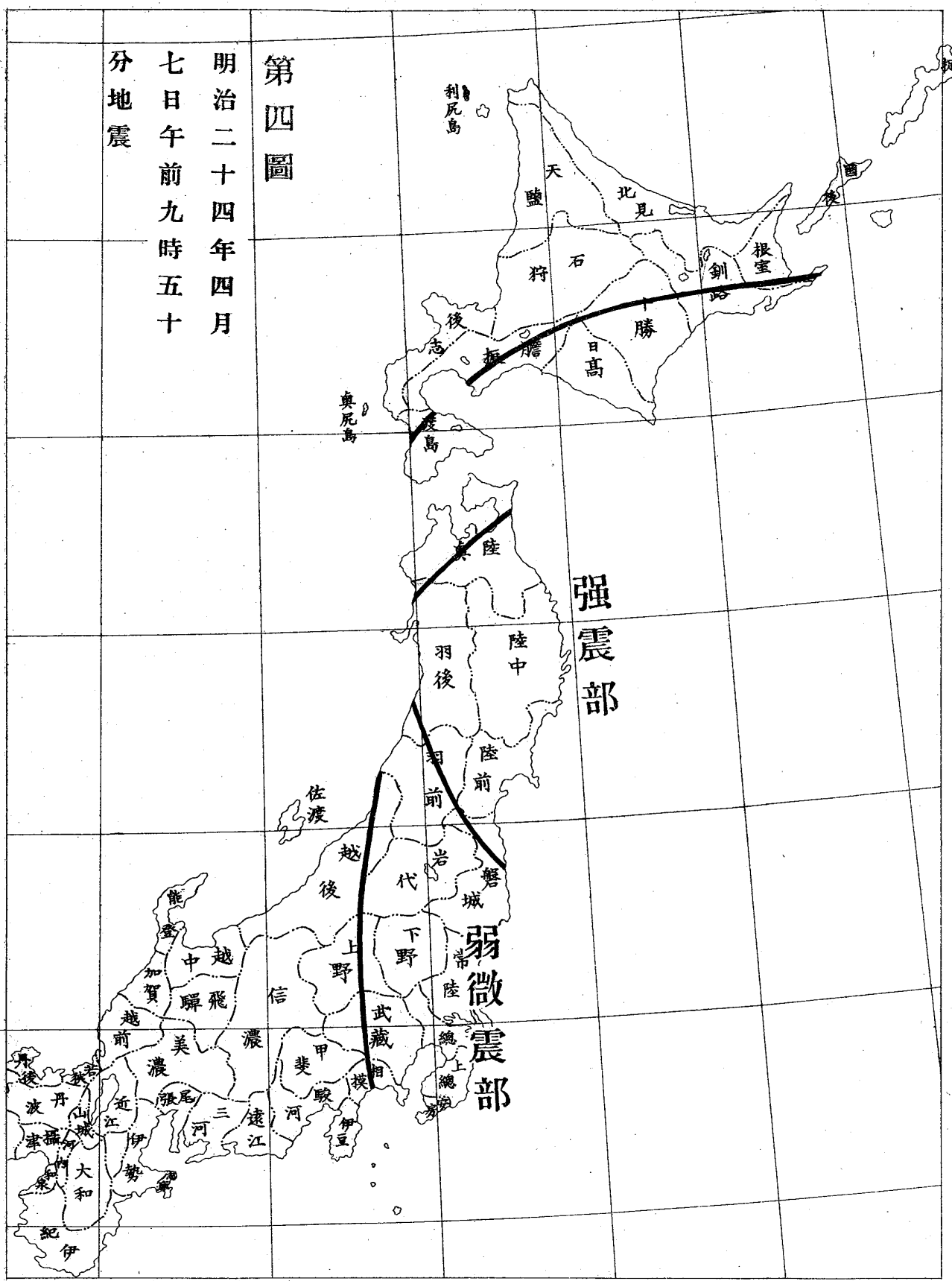
第二圖  
 明治十八年九月五日  
 日午後八時地震



第三圖  
 明治二十一年二月  
 五日午前零時五分  
 分地震



第四圖  
 明治二十四年四月  
 七日午前九時五十  
 分地震







第六圖  
 明治二十六年六月  
 四日午前二時二十  
 七分地震

